

---

# 白い稲妻

THIS

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白い稲妻

### 【Nコード】

N8906Y

### 【作者名】

THIS

### 【あらすじ】

短編で出していた小説を本格連載させます！！

あらかじめ書いていた分を編集させながら出す予定です。

とりあえず小説本一冊分の量がありますが、好評なら続きも書くとおもいます。

注意・・・プロローグは短編とほぼ同じですので注意してください。

これは一人のヒーローのお話。近未来、最強の兵器として作られた生体兵器。そして、人間の突然変異で現れるようになってきた超能力者。

彼らの存在は戦争の在り方を変え、そして新たな社会不安を生みだしていた。

人の姿をした人あらざる者たち。

彼らの存在が色々な事件を引き起こしていた。

そんな中、「白い稲妻」と呼ばれ、人々を助けまわっている謎の生体兵器がいた。

## 第一章 プロローグ 銀行強盗（前書き）

短編で乗っていた小説を本格連載させました！！

プロローグは一緒ですが、それと同時に続きもある程度連載させます。

よろしく願います。

## 第一章 プロローグ 銀行強盗

それは建物の外から見た銀行強盗の現場。

その事件は昼間。会社の休み時間などを利用してお金をおろそうとした人達でにぎわう時に起こった。

犯人の身元や人数などは不明。

手際良くその場にいた人達を全員人質に取った。

人質の数は銀行員と客を合わせて四十人。

犯人達からの何のコンタクトはまだとれていない。

現場は物々しい空気に満ちていた。

銀行の前にはパトカーや装甲車で、警官たちが封鎖をしている。

封鎖区域の外側にびっしりと野次馬が集まっている。

その中に、報道のテレビカメラもやってきている。

「・・・まったく、典型的な光景だな。」

パトカーから降りた高野忠志警視はその光景に軽くうんざりしている。

トレードマークである目だし帽にくたびれたロングコートを纏った彼はため息をつきな新その野次馬の中に飛び込んでいく。

そして、傍にいた警官の力を借り、野次馬をかき分け、相当な苦労を重ねて彼は対策本部のあるテントへとたどり着く。

忠志の姿を見たテントの中の刑事達は一斉に敬礼をする。

その敬礼に片手で答え、忠志は単刀直入に始める。

「さて・・・状況はどうなっている？」

そう言つて、彼は事件の概要と状況の確認を聞く。

「・・・少なくとも犯人の中に生体兵器と超能力者がいるな。」

報告を受けて、忠志は一つの事実を断言する。

報告の中に必死で逃げてきた客の一人からの証言で、拳銃を携帯して別の事件を警戒していた刑事もはち合わせていたらしいのだ。

拳銃を構えて応戦しようとしたらしいが、全く歯が立たないどころか、飛んできた風の塊によって瞬時に倒されたらしいのだ。

「無事だといいが・・・。」

その刑事の安否は不明。客の証言通りなら、彼は忠志の部下で間違いなかった。

「・・・相手が相手だけに迂闊な突入もできない・・・厄介な事件だ。」

その上に相手からまったく要求などはない。

そもそも、銀行で立て籠もる意味すらも判らない。

銀行を襲い、警察が来るまでにすぐに逃げ去ることもできたはずだ。

だが、それをせずに彼らはあえて銀行に立てこもったようにしか、忠志は思えなかった。

逃げ遅れたのなら、犯人側の動揺があったはずだが、報告を聞く限り。そんな様子は全く見られないのだ。

「・・・こちらが後手に回ってしまう嫌なパターンだな。」

計画的な犯行である可能性が高いということに気づいていた忠志はそうぼやく。

「・・・相手の出方をうかがいつつ、嚴重に建物の監視を続ける。そして、少しでも異変があったら知らせるように。どんな些細なことでもいい。報告するように。」

忠志が今とれる最善の手段。それは情報を集めて、備えることだった。

## 生体兵器。

それは人工的に生み出された生きた兵器。そこには四十年前に落ちてきた隕石から採取された特殊な因子を使って生み出された人、またはそのほかの生き物の形をした兵器。

二十年前に勃発し、十年後に終戦した第三次世界大戦に彼らが本格的に投入され、目覚ましい戦火を上げていたが、その戦争の際に脱走する者も大勢いた。もともと各地紛争地帯や、彼らを開発、研究していた施設からの脱走はあいついていたのだが、それが一気に増えた形だ。

逃げてきた彼らは人間の社会にまぎれて生活するようになる。

しかし、明らかに人とは異なる力を持った彼らは社会に適応できない場合が多かった。

己の力を戦いにしか見いだせない者。

その力によって迫害された者。

理由は様々だ。

そして、社会からつまみだされた彼らは社会の闇に堕ち、平和に暗い影を落とすようになっていった。

普通の人間と生体兵器の軋轢は決して小さいものではない。



その上に、謎の隕石の到来と共に、普通の人間にも緩やかだが大きな変化が表れていた。

彼らの中に特殊な力を突然変異で得てしまった物が現れたのだ。その力はSFやファンタジーなどに出てくる一般的な超能力と呼ばれるものと同じのもので、そんな彼らのことを「超能力者」と呼ぶようになった。

彼らの肉体は人とまったく変わりはないが、持っている超能力の力は生体兵器ですら敵わない場合も多い。

彼らの多くは力を隠しているが、その存在もまた社会に暗い影を落としている。

人ならざる力を持つ者の出現に、世界が混沌に包まれようとしていた。

銀行内では、犯人がいた。数は六人。

服装こそはカジュアルで動きやすいものだが、顔はフルフェイスのマスクや、かぶり物のお面、サングラスなどで個々に加工している。

手には拳銃、短機銃などの火器やナイフなどの刃物でぬかりなく武装している。

「大したことねえな。」

その一人・・・おそらくこの犯行グループのリーダーなのだろう。  
伊達メガネに口元を隠すバンダナというシンプルな変装だ。その手  
には風が集まっている。

手に纏った風は、まるで遊んでいるかのようにあちらこちらに猛  
威をふるう。

怯えている人質たちに、胸元から大きな傷を作り、血を流したま  
ま動かない警官にも。

「楽勝というのはいいいことですよ。外にいるサツも手も足もでな  
いし・・・。」

もう一人の男は笑った。ピエロのかぶり物をかぶっている。

「気を抜くな。物事が順調に言っている時ほど、油断しやすい。」

「・・・戦場帰りは違いますねえ。」

ピエロの男はそう言いながら、人質に向けて手を伸ばす。

すると一人の女性が独りでに浮き上がる。

「えっ！？きゃあ？」

「・・・いけないですね。こんなところにまだ・・・。」

まるで巨大な見えない手に掴まれているかのように彼女の全身を  
圧迫していく彼。

その手元に携帯があるのをリーダーの男は見逃さない。

「・・・そのまま抑えている。」

空中で張り付けにされた女性に向けて男は風を纏わせた拳を突く。

拳圧が増幅され、見えない巨人の拳となって礫になった女性に襲いかかり。女性はそのままなすすべもなく壁に叩きつけられる。

「がつ・・・は・・・。。。」

口から吐血しながら気を失い倒れる彼女。それを見てピエロの男は軽く肩をすくめる。

「殺してはいないようですが・・・やり過ぎなのでは？」

「どうせ・・・もうすぐ皆消える。気にする必要などないだろう。」

冷たく言い放ち、彼らは怯えきった人質の方をみる。それを見て彼は軽く笑みを浮かべていた。

その頃金庫室ではその準備が速やかに行われていた。

金庫の中にあつた紙幣や証券、貴金属を三人の男が米袋に詰めていく。すでに詰め込まれた袋の数は十を超えようとしていた。

「よし、順次、下におろしておくか。」

三人の中のリーダー各、がっちりとした大柄の男は二人に指示を出す。

金庫の床には人が通れる穴が斜めに掘られている。掘ったのは彼らの中の一人。小柄な男が超能力で削り取ったのだ。

その穴の先は下水道につながっており、その先には彼らの仲間がいる。

「そうそう、この爆弾はセット終わったのか？」

「ぬかりはない。」

金庫室の扉の横に、爆弾が張り付くように仕掛けられている。

「・・・・・・・・？」

三人の中の一人　線の細い男が通信機を片手に、首をかしげている。

「どうした？」

「いや・・・下にいる連中に連絡が取れない。」

彼らは人質を抑えるリーダーの班を除けば、三人一組の複数の班に分けられていた。

下水にいる連中は仲間と運び出した米袋の回収のための連中だ。力自慢がそろっており、簡単に運び出せ

るように手はずが整っている。

「トラブルで予定が遅れているのか？」

「判らないが・・・ちよつと様子を見てくる。」

通信が取れないことに首をかしげていた細身の男が拳銃を片手に穴を下りていく。

「・・・予定が遅れるのは避けたいところだよな。」

「うん。まあ・・・これくらいがないと刺激がなくてつまらないかも。」

「・・・不謹慎だが・・・まあ悪くないかもな。」

ちよつとした暗雲を吹き飛ばそうと笑みを浮かべる二人。

ぐああああああ・・・。。。

しかし、その笑みが通信機越しに聞こえてきた悲鳴にかたまってしまった。

その悲鳴は・・・先ほど下に降りた男の物に間違いはなかった。

「・・・シャレにならない状態になったよな。」

体格の大きな男の腕がみるみる内に毛むくじらになり、鋭い爪が生えてくる。

腕だけでない、身体の上半身がみるみる内に毛むくじらになり、筋肉が盛り上がり内側から破裂するようになつて、上半身の服が破け飛ぶ。頭の骨格も変わり、狼のようなものに変わっている。

「・・・誰か穴を登つてきている。」

小柄な男は超能力で何者かが穴を登つてきているのに気付く。足音は一切していないのに、それに気づけたのは奇跡に近いものがあつた。

「・・・これは・・・あいつではないよ。知らない・・・誰かだ」

それが何を意味しているのか。判らない彼らではない。

「敵だ・・・先に突つ込む援護を頼むぞ！」

狭い穴では逃げ道がない。そう踏んだのか獣と化した大柄の男が目にもとまらぬ速度で突進していく。

しかし、その刹那、それよりも圧倒的に早い速度で彼は穴から吹き飛ばされて、天井に叩きつけられる。

「・・・なつ・・・何？」

力なく天井から落ち、動かなくなる彼。気を失つたと共に獣化も解けている。

「一撃・・・で？」

獣と化した彼は並大抵の攻撃ではびくともしない。それこそ、銃弾はもちろん、時速六十キロで走ってくる車に跳ねられても、起き上がってくるほどのタフネスを誇る。

それを一撃で倒すというのは普通ではない。

上にも誰かがいるのを察したのだろう。正体不明の存在は穴を駆けあがろうとしていた。

「うつ．．．。うああああああっっっ！」

パニックになった小柄な男はせまい穴に向けて不可視の衝撃波を放つ。

逃げ場のない穴に放たれたその一撃は、穴の内側を大きく削りながら出口へと突き抜けていく。

「はあ．．．はあ．．。やったか．．．。」

逃げ場のない一撃だった。それを避けることなどできることは不可能のはずだった。

だが．．それは不可能を可能にしていた。

小柄な男の首筋に衝撃が走る。そして、その意識が急速に落ちていく。

それが何を意味するのか考える暇もなく、小柄な男は床に倒れ伏せた。

「・・・予定の時間だ。確認ののちに、最終段階に移るぞ。」

リーダー各の男の言葉に、他の連中もよどめ気立つ。

「スイッチの確認はどうだ？」

「・・・問題ありません。」

ピエロの男がスイッチと傍に置いてある爆弾の通信のテストを終える。

「よし・・・予定通り、警察に電話をつなげ。人質を解放する用意があるとな。」

その命令どおりに犯人の一人が電話をとろうとした時だった。

「へえ・・・。もう動いちゃうんだ。」

その場には明らかにそぐわぬ声が聞こえてきたのだ。

その声の主は人質でもなければ、犯人達のものではない。

明らかな第三者の声。

「だ・・・だれだ？」

「どこにいる？」



「……ここにいるよ。」

犯人達があらぬ方向をみている横で、第三者は自ら居場所を告げる。

彼がいたのは銀行の受付窓口の上。そこに座っていたのだ。

黒いバイザーのついたフルフェイスの白いヘルメット。青と黄色のメッシュの入った白いラバースーツで身を包み、首には黄色の長いマフラーが巻かれている。左腕の甲には中央に緑色の輝く宝石が入った金色の小手のようなものがついている。

そんな風変わりな格好をした彼。いつの間にいたのだろうか。誰もそれに気付けなかった。人質も、犯人達も皆、それは同じだ。

「うまく考えているよね。わざとコンタクトをとる時間を焦らして、相手の焦りを誘い、このタイミングで交渉に乗り出す振りをするなんて……。」

窓口から下り、ゆっくりと犯人達に向かって歩いていく彼。

「そして、警察が何だからのアクションをとろうとした段階で銀行内にしかけてあった爆弾を一齐に起爆、銀行ごとすべてを吹き飛ばす。その前に、あなた達は下水道を使って奪ったお金と一緒に脱出崩れてしまった建物の検証と、犠牲になった大勢の人質の身元の確認に時間がかかるのを利用して、発覚する前に国外に逃亡って手はず……なんだね。」

「なっ・・・何？」

「我々の計画を・・・どうして？」

動揺する犯人達に彼はことも無く言つてのける。

「・・・他の場所にいたあなた達の仲間の様子を見ていれば、簡単に判ることだ。」

他の仲間と言つ言葉にピエロの男はとつさに無線で皆に呼び掛けようとする。

しかし・・・誰も応答はなかった。

「あとは・・・ここだけ。」

彼の言つた言葉が、誰もつながらない無線に対する答えだった。

「くっ・・・だが、俺達には爆弾が・・・。」

ピエロがそう言つてリモコンで爆弾を操作しようとする。

だが、リモコンと各所に設置されていた爆弾とのリンクが切断されていた。

「なっ・・・なんで・・・確かにテストはしたのに・・・。」

「爆弾ならもう爆発はしないよ。爆弾が仕掛けられていると知つていて、それを何とかしなかったと思つたか？」

その言葉と共に、一斉に残りの四人が銃を彼に向ける。

そして、躊躇いもせずに引き金を引こうとした瞬間だった。

彼の全身から一斉に電撃が放たれたのだ。

その電撃は銃を構えていた四人を捕え・・・彼らは悲鳴を上げる暇もなく身体を大きく震わせて倒れていく。

「・・・こいつ・・・生体兵器。」

「それも・・・かなり高度な電撃の使い手・・・。」

残りの二人は正確無比な電撃を放つ彼に注意を向ける。電撃のコントロールは火や冷氣などに比べて、かなり高度だ。電気は空気を避けて通る性質があるのがその最大の理由だ。

だが、目の前の彼はそれをまるで問題も無く同時に四つにはなっ  
て見せた。

しかもその電撃は相手を一瞬で気絶させ、なおかつ命を奪わない  
という絶妙な加減。

それだけで相当な使い手だと判る。

「くっ・・・。」

そんな彼に向ってリーダー格の男とピエロの男は手にした短機銃  
を一斉に放つ。

音を立てて放たれる無数の弾丸。

だが、彼は立っただけでそれを受け続けていた。

『?』

弾を撃ち尽くす二人。だが・・・二人の顔は未だに驚愕から抜けきっていない。数秒間の間に二人が放った弾丸の数は軽く六十は超える。

そのすべてが彼に当たっていない。

彼の右手からこぼれおちる弾丸。左手からも弾丸が落ちてきている。

まったく命中していないはずだ。放たれた弾丸をすべて彼はつかみとっていたのだ。

「・・・・嘘・・・だろ？」

呆れた身体能力の高さである。

それと同時に、二人は納得していた。短時間で彼らの仲間がほぼ全滅した理由を。

「くっ・・・。」

リーダー格の男が右手から衝撃波を飛ばす。つかむことができない上に、弾丸よりもはるかに大きく、そ

の上見えない砲弾。それを白の男は必要最小限の動きで、身体をかすめるようにしてかわして、二人に近づいていく。

「・・・シヤレにならないぞ。」

2人が一斉に人質の方へと駆け寄る。

それを見た正体不明の彼はそれを阻止しようと駆けだす。

「引つ掛かりましたね。」

ピエロの男がその隙を見逃すはずがなかった。動きさえ捉える事が出来れば、彼のサイコキネシスがその動きと力を封じることができた。

手をかざし、白の男の動きを封じようとする。だが、発動したはずのその力が・・・電撃によって阻まれてしまった。

「私のサイコキネシスが・・・？」

動揺するピエロの男の身体を電撃が貫く。

声を上げる間もなく倒れる彼。

「動くな。」

しかし、その隙に彼は人質の一人のこめかみに銃口を突き付けている。

「……………」

白の男はそれに動揺するまでも無くその場に立ち止まる。

「……良くも俺達の計画をぶっ壊してくれたな。」

優位に立ったかと思っているのか、リーダー格の男はぎこちないが笑みを浮かべながら、右手を白の男に向ける。

「手加減などしない……。覚悟しやがれ……。化け物！」

右手から放たれる凄まじい空気の砲弾。本気で放ったそれは人一人くらい軽くのみ込みそうな大きさのそれは瞬く間に地面を削って後ろの壁を粉々に打ち砕く。

それと白い男の右拳がリーダー格の男の腹にめり込んだのは同時であつた。

「がっ……は……!？」

引き金を引く暇すらも無かつた。それに引こうにも、腹に右拳がめり込むのと同時に、白い男の左手が拳銃を奪い取っていた。

目に映ることすらできない早技に、リーダー格の男は驚愕しながら、気を失う。

手にした拳銃を握りつぶし、使い物にならない状態にする彼。

あまりに常識外れな戦いに啞然とする人質達の方を見る。

「なれない演技は・・・疲れる。」

深くため息をつきながら彼らの方に駆け寄る。そして、白の男は手刀を振り下ろし、人質を縛っていたロープを断ち切った。

突然の怒号と銃声、そして破壊音は、外にいる忠志達にも聞こえていた。

「・・・何が起きている?」

「判りません。うあつ!?!」

続いて、まるで大砲が打ち込まれたような轟音と爆音。

そのあと・・・静かになった。

「・・・終わったのか?」

不気味な静寂がしばらく続き、それは唐突に終わる。

銀行の正面口のシャッターが開き、そこから人質が一斉になだれ込んできたのだ。

人質の突然の解放に動揺する刑事達。

忠志は不意に銀行の上をみる。

そこには・・・黄色いマフラーをなびかせた白の男が立っていた。

「・・・白い・・・稲妻？」

白い男　白い稲妻は忠志の視線に気づいたのだろつ。その場から唐突に姿を消す。

消えた瞬間が判らないくらいに、素早く、そして唐突な消え方。まるで彼が最初からいなかったかのよう。な錯覚すら覚える。

だが、忠志は確信していた。その存在を何度も目にしていたからこそその確信だった。

「また・・・彼に助けてもらったのか・・・。」

「噂通りか、それ以上に見事な手際だ。」

道を挟んで反対側のビルから見下ろす影があった。

黒いバイザーのついた紅いヘルメット。そのヘルメットには後ろへと延びる銀色の一本角がついていた。

全身を包むのは紅いラバースーツ。腰には黒いマントが巻かれ、両腕には黒い革の小手が巻かれている。

彼の左腰には、白の金属で出来た鞘に収まった機械仕掛けの紅の刀がある。

「詰めが甘いところはあるが・・・それでも並の相手では相手にもならないか。」



影はその場から消えた白い稲妻の後を目で追おうとした。

「去り際も見事としか言いようがないか。完全に出遅れたな。」

残念がる大げさなそぶりを見せる紅い影。

大げさなそぶり故、内心ではそれほど残念がっていないのが丸わかりである。

「また事件は起こる。今度こそは逃がさん。」

その言葉と共に、紅い影もその場から姿を消す。

ぼさぼさのひよろりとした体格の男は一眼レフのカメラを構えていた。

無精ひげの目立つ顔。だが、彼の目は鋭い鷹のようにレンズ越しの何物かを捕えようとしていた。

彼の名前は山本祐司。プロのカメラマンにしてフリーのジャーナリストでもある。彼は長年、仕事の傍らある生体兵器を追いかけて続けた。

「見つけた！」

彼のレンズに捉えたのは、ビルの間を飛び移るように駆けている白い影。

長い黄色のマフラーが尻尾のようになびいている。

月を背にビルを飛び移る彼の姿をシャッターに治める。

「……ん？」

その瞬間、彼がちらりとこちらを見たような気がした。

望遠レンズを最大距離に設定しないととれない距離。具体的には一キロくらい距離はある状況。人間はおろか並の生体兵器や超能力者でも気付けないはずだ。

上しかも一瞬だったので、気のせいだったのかもしれない。

だが、それを成し得る存在だと彼は知っていた。

まさか……気づかれたというのか。この距離で。

だが、そう思った瞬間、彼の姿が唐突に消えてしまったのだ。

「なっ……どっ……どこだ？」

カメラを周囲に向けるが彼の姿は見当たらない。

しばらく辺りをみて、彼はカメラを下ろす。

「……さすがは白い稲妻ってところか……相変わらず見事だわ。」

彼はそう言いながらもそれほど悔しそうな様子ではなかった。



## 第一章 プロローグ 銀行強盗（後書き）

オリジナル・・・連載させてしまった。

こちらは先に連載させていた小説とはまた違う部類のヒーローの話。

こちらはかなり正統派かもしれませんね。

一応、本当の完結までの流れもすべて考えている作品です・

未熟な作品ですがお付き合いください、

## 日常（前書き）

さて・・・白い稲妻の正体はだれでしょうか？

## 日常

時を止める事は決して出来ない。いくら止めようとしてもそれは砂時計の砂のようにさらさらと流れ去っていく。そして、時を止める事が出来ないから、この世のものは絶えず変化していく。

変わらないものは決してなく、それを止める事は誰にも出来ない。それは何事にも捻じ曲げられない。

眩い朝日。それが忠司の瞼に刺さるように照らしてくる。

「ただいま……。」

苦痛にも思える朝日から顔を庇いながら、忠司は家に帰る。

「あら？遅かったのね。」

それを出迎えたのは、エプロンをつけた女性である。ウエーブのかかったセミロングと穏やかな陽だまりのような雰囲気を持っていた。

彼女の名前は清音。忠司の娘で今は大学に通っている。

「ああ……。事件の後始末に時間がかかった。」

疲れた様子の忠司は少しふらつきながらリビングへと向かう。重

く、引きずるような足取りの父を清音は苦笑しながら眺める。

「お帰りなさい。父さん。」

そこには先に朝食を食べている息子 慶がいた。顔立ちは整っているが、割とどこにでもいるようなおとなしい高校一年生。誰よりも普通が似合う少年であった。

しかし、慶は朝が弱く、寝起きが悪いので朝は比較的口数は少ない。朝食は彼にとってはエネルギー補充というよりは、噛むことによって目を覚ますことに重きを置いている。

「・・・さつそくニュースでやっているか。」

慶の視線の先にあるテレビのニュースに顔をしかめる忠司。そんな彼に清音は味噌汁を差し出す。忠司はそれを飲みながらニュースを見る。

先の銀行立てこもり事件は裏に銀行を爆破させ、それで混乱している隙に逃走するという恐るべき計画があった。もしも、それが成功していたらかなりの死傷者が出ていた。

だが・・・その事件はある存在によって未然にも防がれた。

謎のヒーロー「白い稲妻」の手によって・・・。

「・・・まったく、またやられたよ。」

救出された人からの証言では、幽霊のようにその場に現れ、銃弾

を素手で掴み取った。全身から電撃を放射させた。目にも留まらぬ動きを見せた。縄を手刀で切った。そして、いつの間にかいなくなったことである。

信じられない事かもしれないが、この中のいくつかは現場検証で実際にあったことが確認されている。

この事件の後、忠司は銀行各地に仕掛けられた爆弾の処理など、事件の事後処理をするために徹夜する羽目になったのだ。

「にわかに、信じられないわね。」

「・・・そう・・・だね。」

何故か歯切れ悪そうに応える慶。

清音がそれを横目で微笑みながら、朝食の味噌汁とご飯を置く。寝不足などで疲れているがお腹は空いているらしく、忠司はそれを次々と口にしていく。

やがて朝のニュースは芸能関係へと変わる。

「・・・・・・・・」

テレビに映る一人の歌手の姿を目にした慶が食事の手を止める。

オリコンチャート一位「NATUME」と出ている彼女。

大人びたファッションを纏い、美人だが、まだどこかにあどけな



さの残る顔立ちをしていた。自然と惹かれてしまう美声、そして心に深く響いていく歌唱力が彼女にはあった。

歌っているのは、「タンポポ」と言うタイトルの春を題材にした歌。痛いくらい寒々とした冬を乗り切り、春を喜び咲き誇る歌。それを恋愛に例えて彼女は歌っていた。苦難を乗り越えた者達だけが結べる絆。

慶はテレビで歌っている彼女の姿に見惚れ、そして彼女の歌に聞き入っていた。

「栞ちゃん、ホントに綺麗になったわね。」

清音はそんな慶の様子に苦笑していた。

「・・・うん。」

その言葉に、何故か慶は少し寂しさの感じる笑みを口元に浮かべていた。眩しい彼女を見たいけど、見ているのがすこし辛いようなそんな目を彼はしていた。

「ねえ。もうそろそろ学校にいかなくてもいいの？」

呆けている慶に清音は一発で現実に戻すキーワードを口にしておあげた。

「あつ、そうだね。」

テレビの画面に映っている時間を目にした慶に急いで残っている

朝食を口にする。先ほどまで寝ぼけなが

ら、ゆっくりと食べていたのとは断然違う。瞬く間に朝食を食べ終わると、慶は鞆を手にリビングを後にしていく。

「行ってきます！」

慌てて玄関に向かう慶の後姿を忠司はじっと見ていた。父親も彼の態度に気づいていた。

「……あいつももうそんな歳になったのだな。」

忠司の口から自然と漏れたのは、自分の息子の微笑ましい変化。

「そうよね。結構見ているほうからしたら、もどかしいくらいだわ。」

そんな父よりもかなり早くに気付いていた清音は少し澄ました顔で応えていた。

窓辺から朝日が差し込む中、編集長はとある新聞をじっと見ていた。

それは月をバックにビルの間を飛び越えていく白い稲妻を捉えた写真。凄まじいスピードで飛んでいる事を後ろに靡くマフラーが教えてくれる。一面とはいかないが、それでも新聞の一覧を立派に飾っていた。

「……よく撮れたものだな。」

机の前にいるのはその写真を取った男　山本祐司であった。

祐司は生体兵器関連の事件、特に白い稲妻に関わりのある事件を追っていた。

「それはもう。彼の逃走経路も幾らか検討はついていますので。」

白い稲妻。圧倒的な戦闘力を持ち、電撃を放射することから生体兵器であると推測されている事以外は何もわかっていない謎の存在である。その名は全身を覆う白いラバースーツに稲妻のごとき彼の動きと戦い方から警察関係者がつけたものだという。

その行動目的も不明。身長、体重などの身体データも何故か取れなく、全くといっていいほど謎であった。だが、彼の行動は多くの人を助けていることは事実で、彼は謎のヒーローとして世間をにぎわせていた。

「それで、今後も彼の取材を続けていくつもりなのか？」

「もちろんです。」

編集長の言葉に力強く即答する祐司。

「彼の取材・・・是非、今後も私に任せてください！」

編集長の机を思わず叩きつけてしまっていることなど気付かない祐司。だが・・・その行動は日常茶飯事

なので、周りはそれほど驚かなかった。

「おつ、おはようございます！」

居眠りしていた部下の一人が忠司に気付き、椅子から飛び跳ねるように飛び起きる。

「・・・もうおはようといえる時間じゃないだろう。」

苦笑しながらも、忠司は席につく。徹夜明けで一端家に帰り、仮眠をとってから出勤である。日はすでに上がりきっている。

彼の所属している警察庁の刑事課でも、昨日事件の疲れが残っている者が多く、先ほどの彼のように居眠りをしているものさえいた。

そんな者達にあくびをかみ殺しながら、苦笑する忠司。

そんな彼に部下の一人がコーヒーを持ってきてくれた。忠司は軽く礼を言いつつ、それを口にする。コー

ヒー特有の苦味と覚醒作用のあるカフェインが眠気をごまかしてくれる。

「そう言えば、高野警視聞きましたか？新しく警察省内に対生体兵器犯罪の対策部署が出来るという話を？」

「ああ・・・。話には聞いている。」

多発する生体兵器や超能力者による犯罪。それは一般人が起こす犯罪とは比較にならないほどの被害を出

している。そのために、その対策部署の設立が持ち上がってきたのだ。

「それが、いよいよこの庁内に試験的に導入されるみたいですよ。」

「・・・なんだと？」

「うわさでは、生体兵器が何体かやってくるみたいです。」

都内で多く起こっている生体兵器、および超能力者の犯罪。その事件の多くに関わっている謎の生体兵器がいる。

「白い稲妻のおかげというわけか・・・。」

生体兵器や超能力者の犯罪の解決に、彼は多大な貢献をしている。しかし、正体も目的もしれない謎の存在に頼っているわけにはいかない。そのために、警察内でも自力で迅速に解決するため、そして万が一の時

には高い戦闘能力を持つと思われる白い稲妻に対抗するための戦力として、この部署を立ち上げる案が持ち上がっていたのだ。

「その隊長となる人が明日来るみたいです。生体兵器らしいですけど・・・それなりに優秀だと聞いていますよ。」

「それはまあ・・・楽しみだな。こっちも色々とお世話になりそうだし、挨拶くらいはしておくか。」

忠司はそっけなく応えてコーヒ―を再び口にする。

その時の忠志は、思いもしなかっただろう。まさかその部署とその隊長が自分に関わりのある人で、後の事件で色々と深く関わってくるなどとは。

授業終了のチャイムが鳴り、先生が授業の終わりを告げる。待ちに待った昼休みの到来に、教室はすぐににぎやかになる。各々席に立ち、たわいのない会話を始める。

だが、その中で慶はただ一人席に着き、黙々とノートにペンを走らせていた。

「おーい。慶、まだノート書いているか？」

そんな慶に話しかけてくる一人の少年。狼を思わせる堀の深い顔立ち。肩まで届く位の長い髪を後ろで束ね、どこことなくワイルドな雰囲気を出している。しかし、その顔に浮かべる表情は人懐っこく、どこことなくお調子者の雰囲気をかもし出している。

「猛、ごめん。もうすぐ終わるから。」

慶は自分のノートを見ながら、もう一つのノートに写している。几帳面な彼の性格を反映しているのか、写している内容は事細かで、なおかつわかりやすく整理して、しかも驚くほど早い速度で書かれている。

「本当にけなげな奴だな・・・。」

少年・猛は慶が誰のためにノートを書いているのか良く知っていた。

「まったくだ。」

猛の隣には、髪を短く切った少年 健二が立っていた。少し背は低いが顔立ちはどこことなく大人びている。性格も見た目に違わず、色々としつかりとしており、学級委員と生徒会の役員を務めている。

「愛しの彼女のためか。本当に泣けるね。」

「いつ・・・愛しのつて・・・。」

猛の発言に顔を真っ赤にさせる慶。とっさに言葉を口にしようとするが、舌がもつれるのか、まったく言葉にならない。

「何も言つな。俺達は良く知っている。お前の想いは誰よりもな。」

「正確には、このクラス全員が知っていることだが。」

面白そうに慶をからかう猛とそれに突っ込みをいれる健二。

しかし、その突っ込みはさらに慶の真っ赤な顔を赤らめるだけであつた。

調子に乗って慶の肩に腕を乗せる猛。

「まあまあ、相談ならいつでも乗ってやるぞ。色々と・・・なが

っ!？」

その彼の側頭部に見事な上段回し蹴りが決まる。

「・・・・・・・・。」

崩れ落ちていく猛。だが、慶も健二もその光景を見ても特別に驚くことはしなかった。

ただ・・・「またか」といわんばかりのため息をつくだけであつた。

「まったく、馬鹿な事をしているのよ!」

そして、その蹴りを放った女子が仁王立ちで崩れ落ちた猛を見下ろしていた。

活発さを意識したショートカットの髪、そしておてんばという言葉葉すらも優しいくらいの過激な迫力が彼女 若菜にはあった。

「それはこっちの台詞だ!」

ダウンから直ぐに復活した猛。常人を遥かに超えた頑丈さである。

「何でお前はいちいち俺を止めるのに蹴りなんか使うんだよ!しかも手加減なしの半端じゃないのをな!あんなもん、いちいち食らっていたらこっちの首がいかれてしまうわ!」



「あら？あんたは無駄に打たれ強いから、これくらいがちょうどいいと思っただけど？」

ちなみに若菜は少林寺拳法部に所属しており、その蹴りの破壊力と精度は一年にして男女あわせて部内で一番だといわれている。

「まったく、この暴力女！お前のあいさつは蹴りだけか！？」

「なんですって！？だいたいあんたわね・・・！」

そして、若菜と猛は派手な口げんかを始める。しかし、クラスの皆はそんな二人の口論など気にも留めていない。

「何度も良く飽きませんよね。」

そんな二人をよそに一人の女子が微笑ましい笑顔で歩いてくる。

長い黒髪に、陽だまりの下にいるかのような穏やかな笑顔が似合う彼女　のどかはさりと云う。

「二人は放っておいてご飯にしませんか？夫婦喧嘩は犬も食わないといえますから。」

『誰が夫婦喧嘩だ！』

のどかの発言に、異口同音で反論する猛と若菜。その息のぴったりにした仕草に周囲からは失笑が漏れる。

「まったく、あんた達も良くやるわね。」

笑いを堪えながら話しかけてくるのは、眼鏡をつけた少女　スミレであつた。ポニーテールで大人びた背の高い彼女。ざつくばらんな発言が目立つが、皆からは頼れる姉御として慕われる。もっとも、彼女からしたら、同じ年なのに姉御は止めて欲しいらしいが。

「それば僕も同感。」

「あんたも人のことは言えないけどね。結構良く書けているじゃないの。さすが・・・愛がこもっていると違うわ。」

「すっ・・・スミレさんまで・・・。」

慶は顔を赤らめながら慌ててノートを閉じる。

「まあ・・・色々と一区切りついたみたいですから、お昼にしましうよ。」

微笑むのどかの言葉に、猛と若菜は互いにそつぱを向く。

そんな彼らを見て、スミレと健二は視線を交わし、苦笑しながら肩を竦める。

そんな光景に、慶は楽しそうに机を動かし始める。

それは慶にとっては、かけがえのない一時であつた。

大学の帰り道。清音の手には夕食の買い物食材が入ったバッグ。大学の帰りに買う習慣がついていたので、ビニール袋の要らない買い物バッグをいつも持っていくようにしていたのだ。

「・・・よし、こんなものでいいかな？」

彼女が家事をするようになってからもう五年になろうとしている。亡くなった母の変わりに忙しい父とまだどこか頼りない弟を支えていた。

帰り道に腕を組み、肩を寄せ合って歩くカップルが目に入ってくる。

清音は大学の友達から言われた言葉が脳裏によみがえる。

あなた・・・どうして、彼氏作らないの？

大学に通い始めてから二年目。彼女の知り合い中では付き合い始めているものもチラホラ現れてきた。

美人でおしとやかな清音はかなり多くの男から交際を申し込まれていた。だが、清音はそれをすべて断つてしまっている。友達にその理由を不意に聞かれてしまったのだ。

「どうして・・・って言われてもね。」

清音はため息混じりにつぶやく。

恋愛に興味がないというわけではない。しかし、中々出来ない理由として、彼女にはそれにたる相手がま

だ見つからなかったのだ。

少しばかり理想が高いのがある。彼女の父である忠司は立派な父親で、そして優秀な刑事でもあった。異性を見るときどうしてもその忠司を基準に見てしまうところがあったのだ。忠司と並ぶくらいの男性が中々いないのだ。

そして、実は彼女には誰にも言えない交際を断る理由がもう一つあったのだ。

これじゃあ・・・ねえ。

その理由にため息をつく清音の目に一人の子供の姿を捉える。

「・・・あつ？」

その子供は転がるボールを追いかけて、道路に飛び出してきたのだ。その子供にむかつて一台の車が突っ込んでくる。子供はその車にまだ気付いていない。

「・・・!!」

考えるよりも先に清音の足は動き出していた。買い物バックを放り出し、高鳴る心臓の鼓動がゆっくりと聞こえる。一步、また一步、アスファルトを蹴るように足をひたすら前に出す。側にたどり着くと、その子供を突き飛ばすようにそこに飛び込んで行った。

そして、そこに割り込む影。

「・・・!？」

それは信じられない速度で道を駆け、すれ違い様に清音と子供を両腕で掬い取るように抱えていったのだ。

車が清音の髪を掠めるように通り過ぎ、そして止まる。

「……ふう。危なかった。」

清音と子供を抱きかかえた男は二人の無事を確かめ、緊張を解いていく。

短く整えた髪。そして精悍な顔をした青年であった。歳の頃は二十代半ばくらいだろうか。スーツの上に黒いロングコートを羽織った長身痩躯の男。だが、子供と女性とはいえ、それぞれ片手で軽々抱えるほどの力を彼は持っていた。

男は二人を下ろすとしゃがんで子供と視線を合わせていった。

「道を渡る時はちゃんと左右を確認しろよ。」

その笑顔は無邪気なものであった。突然のことに戸惑い、泣きそうになっていた子供がそれを見て笑顔を取り戻す。

「よし。笑ったな。その笑顔のまままで遊んで来い。友達も待っているぞ。」

そして、男は子供が追いかけていたボールを手渡してやる。子供はそれを手にして公園へと戻っていく。男は手を振りながらそれを見送る。

そして男の視線は清音に移る。

「ほら・・・忘れ物だ。」

「あつ・・・。」

男の手には清音の買い物バッグ。それは子供を助けようとして放り出したものだ。

「卵も無事だ。安心しろよ。」

「はっ・・・はい・・・。」

予想もしていなかった男の行為に驚きながらも買い物バッグを受け取る清音。

驚く清音を見て今度は穏やかな笑みを男は浮かべる。

「じゃあな。あんまり無茶はするなよ。」

そして男は何事もなかったかのようにその場から去っていく。

清音は去り行くその背中を見えなくなるまでじっと、眺めていた。

彼女の目にはその背が不思議な位大きく、そして頼もしく見えてしまった。

## 日常（後書き）

続いて続きを投稿してみました！！ここからあと一話連続で投稿する予定です。

## 非日常

夜の街・・・パトカーのサイレンがあちらこちらで鳴り響いていた。

次々と捕まっていく仲間を尻目に、一台のスクーターを乗り捨て一人の少年が路地裏へと逃げ込む。

「・・・はあ・・・はあ・・・」

暴走族。彼らは心に受けた傷や、溜まっていたさまざまな辛さ。それを晴らすために、その苦しみから逃れようと彼らは集い、そして群れて夜の街を暴走しているのだ。

だが、身勝手な暴走がいつまでも許されるわけではない。

「・・・くそ・・・くそ！」

少年の胸にやるせなさど苛立ち、そして恐怖が募る。彼らの仲間はずでに待ち構えていた警察に捕まっている。

警察官の怒号が少年の耳に木霊する。もつれそうだが、それでも前に出ようとする足。だが、不幸にも少年の行く先は行き止まりであった。少年の目の前に金網が立ちふさがっていたのだ。

「見つけたぞ！」



追いつめられた少年。追いついてきた警察官の足音を耳にしながら必死に名って考える。考えすぎてパニックになるほどに。

そして、思い出してしまった。ポケットの中にある緑色の液体の入った注射器の存在に。

「・・・・・・・・。」

それは少し前、少年が仲間と一緒にとある男から筋肉増強剤として買った薬であった。価格は普通の風邪薬を買うのと同じ価格。手軽な値段と男の巧みな話術に少年も買ってしまったのだ。

効果あるかどうか疑わしいものがあつた。だが、藁にも縋る思いであつた少年はそれを使う躊躇いを無くしてしまった。

ポケットから取り出した注射器を乱暴に腕にさす少年。腕に走る鋭い痛みには歯を食いしばって耐えながら、薬品を注入し始める。焼けるように痛む部分から冷たい異物が流れ込み、それが広がっていくのを少年は感じていた。

そして冷たいそれは血管を通り、凄まじい速度で全身に回っていく。

回っていくと共に、冷たさとは反比例するように体が熱くなっていき、少年は視界がぼやけていくのを感じ始める。

心臓が痛くなるほどに勝手に激しく鼓動している。

「うつ・・うあ・・あう・・・・・。」

そして、少年は自分の目を疑う事になる。よろけて膝をついた彼。その体を支える自分の手を見たのだ。それがおぞましい怪物の手に変わっていたのだ。

それが、少年の最後の記憶になってしまった。

少年を追い詰めた警官は信じられないものを見ていた。苦しむ少年の体が膨らんでいく。全身の筋肉、骨格が膨張してそれに衣服が耐えられなくなり内側から破裂するように破れていく。

膨張した筋肉の表面が浅黒く固くなっていく。染められていた髪も伸びていき、真つ黒な髪になっていく。瞳は充血し、口からは肉食動物のような鋭い犬歯が出ていた。角こそは無かったが、その形相はまさに鬼というのにふさわしかった。

少年だった怪物が吼える。その咆哮に警官は我に返り、とっさに拳銃を手にする。怪物は警官に向かって突進してくる。

振り上げられた腕。それが振り下ろされると、銃声が鳴ったのはほぼ同時であった。

「こっ……こちら××区。暴走族の一斉検挙中、謎の怪物が出現！拳銃で応戦するも多数の犠牲者が出ている。しっ……至急応援を頼む！うっ……うわああああああ！！！！」

「……なんだこれ？」

現場を訪れた祐司はあまりの悲惨さに言葉を失っていた。

彼は帰り際に、直ぐ近くで爆発音を耳にして駆けつけてきたのだ。夜のビジネス街は人が少なく、爆発したというのにその現場にすぐ駆けつけてきたのは彼だけであった。

まず彼の目に付いたのは、爆発炎上するパトカー。その傍には警察官が血だまりの海に倒れていたのだ。彼だけではない。路地裏の傍では二人の警察官が拳銃を手にしたまま血の海に倒れていた。

何かとてつもない力が暴れたのか、道路はところどころひび割れ、コンクリートの壁が抉り取られていた。

とつさにカメラを手にする祐司。そして、己を殺しその現場を写真に収め始めた。

だが、何度かシャッターを切ったところで彼の手が止まる。

「うつ……うつうつ……。」

燃え上がるパトカーの傍で倒れている警察官。その彼の体がかすかだが動く。

祐司は倒れている警察官のところへと駆け寄る。

倒れていた警察官は爪のようなもので胴体を袈裟に切り裂かれて

いた。傷口からは赤黒い血がにじみ出てきており、彼の服を赤く染めていた。

傷の程度はわからないが、出血の量から早く手当てしないと命に関わるということは明白であった。

「くそ……。」

取材どころではなかった。祐司は携帯で救急へ連絡する。

「うつ……うつ……こは……？」

「気がついたか。」

荒い呼吸と焼け付くような痛みで自分が生きていることを確かめる警察官は祐司のほうへと視線を向ける。

「一体何が起こった。まるで何かの化け物か何かが暴れたような……。」

「少年が……突然怪物になって……。」

「少年が怪物に？」

脈絡も無い警察官の言葉に、訳がわからず激しく聞き返してしまふ。

「うわああああっ!!」

二人の警察官が倒れている場所の反対側の路地から一人の少年が

逃げてきたのだ。そして・・・その後を追うように一体の怪物が姿を現す。その大きさは三メートル近くあるうか。巨人とも鬼ともとれるような怪物であった。

「なっ・・・何？」

その怪物の出現と、応援が来たのはほぼ同時であった。二台のパトカーから降りてきた四人の警察官は、それぞれ現場の悲惨さと怪物の出現に動揺を見せていたが、すぐに拳銃を構える。そして、一斉に怪物に向けて発砲した。放たれた四発の弾丸はそれぞれ怪物に命中。赤い血が噴き出す。

だが・・・怪物は倒れない。怯みこそはしたが、それほどダメージを与えた様子はなかったのだ。拳銃が命中した箇所出血もすぐに止まる。

痛みを与えてきたものに対する怒り。狂気で血走った瞳はその痛みを与えた者達へと向けられる。

怒りの雄叫びと共に、巨体に似合わぬスピードで突進してくる怪物。警察官達は何度も発砲するがその突進を止めることは出来なかった。鋭い爪が振り下ろされ、一人の警察官が体を切り裂かれて倒れる。もう片方の腕を振るい、二人の警察官をまとめてなぎ払い、壁に叩きつける。そして、倒れていた警察官を助けようとした最後の一人が振り下ろされた腕で地面に叩きつけられる。

「・・・・・・・・」

そして怪物は祐司の目の前にいた。祐司達を見下ろすその瞳には

明確な殺意と狂気が宿っている。怪物はためらうことなく生きている二人に向かって鋭い爪のついた腕を振り上げ、それを振り下ろす。

鋭い爪。それが二人の体を切り裂こうと迫る。

次の瞬間、祐司が目にしたのは血に染まった己の体ではない。

強烈な打撃音とともに宙に浮く怪物の体と拳を天に突き出した白い影であった。

ゆっくりと地面に倒れていく巨体の怪物。黄色いマフラーを靡かせながら、それを見る白い影。その光景を祐司ははつきりと目に焼き付けていた。

爆発騒ぎを耳にした赤い影の彼はビルの上から白い影を見ていた。

すばやい動きで割り込み、自分の数倍はあろう巨体を持つ怪物の体を拳で吹き飛ばす彼。

「……まずは、お手並み拝見と行こうか。」

影はその戦いを今は静観していた。

拳を収めながら、白い影　　白い稲妻は軽いため息をつく

「……まさかと思っていただけ、こんなに酷いことになっていたなんて……」

地面に倒れていた怪物は起き上がりながら、白い稲妻を睨みつける。その狂った敵意を攻撃してきた彼に向けたのは明白である。

白い稲妻は後ろに視線をやる。

「……怪我人をよろしく願います！」

白い稲妻は後ろの彼　　祐司の返事を待たずに走り出す。常人では考えられないくらいの速度の突進。それを捕らえていたのか、怪物は雄叫びを上げながら、その太い腕を振り下ろす。

だが、怪物の手に伝わってきたのは肉と骨を砕く感触ではなく、固いアスファルトを砕く感触であった。

そして、次の瞬間、軽く宙に浮いた白い稲妻の回し上段蹴りが怪物の頭部を捕らえた。しなやかな跳躍からの鋭い斬撃のような蹴り。それに打ち抜かれ怪物の体が大きくよろける。

怪物が体勢を立て直す暇も与えず白い稲妻は動き出す。怪物の目の前に着地し、膝を沈めて衝撃を吸収すると同時にためを作り、光を帯びるくらい高圧の電撃を纏わせた拳を胴体に叩きこむ。

その一撃に、怪物の巨体が吹き飛ばされ壁に激突する。そして……そのまま怪物は動かなくなった。

動かなくなった怪物の体が急速に縮み出す。そして、あつという

間に元の少年の姿に戻っていった。

「倒したら元に戻るといわけか。でも・・・本当に人間が変身していたのか・・・」

彼の視線が元に戻った少年から別の方へと向く。

「しかも、一体だけでなく、他にも何体もいるみたいだし。」

視線の先にある暗闇から同じような怪物が浮かび上がるように出てくる。

「手加減がわからないから、少し手間がかかるよな。」

拳を握り締め、怪物達を迎え撃とうとする白い稲妻。その口調にはまだ余裕があった。

怪物の一体が雄叫びを上げながら走り出す。

そしてその怪物は突然悲鳴を上げて立ち止まる。

「・・・!？」

立ち止まった怪物の腕に一頭の巨大な銀の獣が鋭い牙を食い込ませていたのだ。

腕を振り回してそれを振りほどこうとする怪物。だが、獣はものともせずに怪物を引きずり倒してしまう。

もう一体の怪物が狼に殴りかかる。だが、その拳は派手な銃声と



ともに止まってしまふ。

胸から血を噴出しながらよろめく怪物。

その銃声の主は白い稲妻の背後にいた。

黒いロングコートを羽織った長身痩躯の男。精悍な顔と短く切り上げた髪のさわやかな青年であつた。

えっ？

白い稲妻はその彼の姿を見て全身の動きを止めてしまつていた。

その男の左腕には銃口から硝煙の立ち昇る拳銃が握られていた。だが、その拳銃は普通の人間が使う銃よりも銃口が大きい。軍用で使われる五十口径の自動拳銃であつた。

銃弾を受けた怪物がまた動き出そうとする。男は再び引き金を引く。その銃声は普通の拳銃よりも大きく、そして派手だ。その威力もそれに違わぬものがあつた。

普通の拳銃ではあまり効果が無かつた怪物が大きく怯み、後退していく。男は怪物に向けて数発の弾丸を叩き込む。通常よりも遙かに破壊力もある分、反動も強い拳銃。男はそれを片手で、しかも正確に怪物に命中させていた。

度重なる銃撃によりよろと後退する怪物。その怪物に向かって男は走り出す。そのスピードは人のそれを超えており、瞬く間に怪物と自身の距離をゼロにする。そしてその勢いと共に、銀のナックルを握りこませ

ている右の拳を怪物の腹部に叩き込む。

怪物の体を凄まじい衝撃が突き抜ける。そして、その一撃で怪物は沈黙した。

それとほぼ同時に、狼も引きずり倒した怪物の首筋に鋭い牙を突き立て、そして力の限りその巨体を引きずるように投げ飛ばした。

壁に激突するもう一体の怪物。壁を破壊しながら、怪物は人の姿に戻りながら倒れていった。

「・・・この街での初めての实战にしては悪くないぜ。」

男が狼に向かって声を掛ける。一方の狼も少しうれしそうに鼻を鳴らす。

『・・・！？』

だが、次の瞬間そんな一人と一頭の上を白い稲妻が飛び上がっていた。足には凄まじい量の電撃が凝縮され、バチバチと光と音を出していた。

アーチを描くように一人と一頭を飛び越えながら、足先から体をひるがえす白い稲妻。遠心力と落下していく全体重を乗せた踵を突進してきたもう一体の怪物に叩き込んだ。

凄まじい破壊力が込められた一撃に怪物は悲鳴を上げる暇も無く地面に叩き伏せられる。

そして、そのままその姿が人へと戻っていった。

「……想像以上に強くなったな。」

怪物が人に戻った事を確認し拳銃を懷にしまいながら男は、白い稲妻に親しげに話しかけてきた。白い稲妻の方も固まったかのように男を見ている。

「何故……ここに？」

「偶然通りかけた……なんて理由にはならないよな。」

白い稲妻はゆっくりと息を吐き出し、男のほうを見る。どこと無くその仕草と口調に軽い戸惑いが見え隠れしている。

「細かい話は後にしたほうがいいみたい。」

だが、白い稲妻は直ぐに気を取り直して、身構える。

「まだ残っていたか。」

男も拳銃を再び取り出す。その動きに一片の無駄はなかった。

二人の視線の先にはもう一体の怪物。唸りながら今にも飛び掛ろうとしている。

白い稲妻が先手を仕掛けようと走り出した瞬間、閃光が白い稲妻に向かってきた。

「・・・!？」

白い稲妻はとっさに後ろに飛び退く。

怪物と白い稲妻の間に赤い影がいつの間にかあらわれていた。

その手には黒い刀身の刀が抜き放たれている。

「そろそろ・・・こっちもやらせれもらおうか？」

白い稲妻の足元は先ほどの閃光による切り傷が出来ている。そして・・・赤い影が背を向けているのにも関わらず怪物は微動もせず固まっていた。

赤い影がゆつくりと刀を鞘に納める。その仕草は居合いの納刀そのものであった。

収めきつたと同時に、怪物の体が袈裟に切り裂かれる。

「・・・強い。」

白い稲妻は怪物が斬られた瞬間を見ることが出来なかった。

悲鳴すら上げることできず血を噴出しながら倒れていく怪物。それを背に赤い影は白い稲妻と対峙する。

白い稲妻はゆつくりと構える。左拳をやや前に、右拳はそれよりも手前にやり、体は半身。どこにでもあるファイティングポーズそのものだが、彼の構えは無駄がない。それだけで、急所が集中している体の中心線をすべてカバーしている。

赤い影はそれだけで彼はそれなりの格闘の技能を持っていることを見抜く。

鞘に収めた刀に手を当てる。白い稲妻と同じく半身だが、腰を落とし、重心はやや前に傾ける。

「・・・確かめさせてもらっぜ。お前が斬る価値のある相手かどうか・・・。」

その言葉とともに赤い影は飛び出すように走り出す。そして、強い踏み込みとともに手にしていた刀を抜き放った。

## 非日常（後書き）

すみません…冒頭からバトルになっております。結構この話はバトルが多いので幕間に色々な形で日常も書いていきたいと思っています。

## 次回予告 「刀鬼」

赤い影。白い稲妻との因縁がここよりはじまる。

## 刀鬼（前書き）

・ ・ ・ 続いて更新。さて ・ ・ ・ 白い稲妻の正体 ・ ・ ・ この話で分かる人は分かってくれると思います。

## 刀鬼

白い稲妻がとつさに身を引いたのは、勘に近い。だが、その判断は間違っていないかった。突然姿を消し、そして次の瞬間鋭い閃光とともに自分の目の前に現れたのだ。

抜き放たれた刀の一閃は彼の体を覆う白いスーツを浅くだが切り裂く。

「ほう・・・。」

一方の赤い影は自分の剣が避けられたことに軽く驚く。

「まさか・・・これをかわすことが出来る奴がいるとはな。」

「いきなり何を・・・。」

「問答無用！」

白い稲妻の言葉を切るように赤い影は黒い刀を振り下ろしてくる。

白い稲妻はそれを辛うじてかわす。だが、赤い影の刀は止まらない。無数の斬撃がその刀から放たれる。

その刀がある時はかわし、ある時は金属のように固くなった拳の甲で受け流して防ぐ。だが・・・拳と刀では間合いの点で白い稲妻にとっては分が悪い。



「くっ・・・このままじゃ・・・。」

かわしきれず、受け止めきれずに全身に無数の切り傷が出来る白い稲妻。赤い影の剣はそれだけ鋭く早く、精密で、そして重かった。だが、白い稲妻も反撃に出る。振り下ろしてきた赤い影の刀を見切り、拳で横に払う。そして、それと連動させる形で赤い影の左腕に回し蹴り繰り出す。

不意を突かれた反撃に赤い影の体がよろめく。そこにさらに追い討ちを掛けるべく、踏み込み右肘で鳩尾をえぐるように突き出した。「ここで反撃してくるとはな。」

だが、その一撃を赤い影の左腕が受け止めていた。刀を使うには狭すぎる間合いに舌打ちしながらも、刀の柄で白い稲妻を殴り飛ばす。

「ぐあっ!？」

吹き飛ばされていく白い稲妻。その後を赤い影が迫る。しかし、それを白い稲妻の全身から放射される電撃が阻んだ。

視界を失い、足を止める赤い影。白い稲妻は空中で身を翻らせ、ビルの壁に足をつけてその壁を思い切り蹴り上げる。ビルの壁にヒビが入るほどの力で飛び上がる白い稲妻。そして、勢いそのままとび蹴りを放つ。

「ぐおおおおおおっ!？」

突然の攻撃に避けることも出来ず、凄まじい勢いが乗ったそれを交差させた両腕で受け止める赤い影。だが、白い稲妻は蹴りを命中させた瞬間にさらに足に力を込め、後ろに飛び上がる。突進に踏みきりの反動まで加わった、半端ではない破壊力に踏ん張りきれず、赤い影は道路を足で削りながら反対側のビルに激突していった。

宙返りをしながら地面に着地する白い稲妻。砕けたビルの壁から、ゆっくりと赤い影が姿を見せる。

「さすがに・・・今のは効いたな。だが・・・まだこれからだ。」

そして、再び刀を構え、切りかかろうとする。

だが、一発の銃声が赤い影の言葉と刀を止めた。

赤い影がとつさに刀を払い何かを切った。

「・・・悪いが、これ以上こいつと戦うのはよしてくれないか。」

戦いを見ていた男は手にしていた拳銃の引き金を再び引く。派手な音とともに放たれた銃弾は真っ直ぐに赤い影の方へと向かっていく。だが・・・その銃弾は彼の刀が切り落としてしまった。

「マグナムを切り払うか。」

「この程度の芸当、白い稲妻にもできるはずだ。」

赤い影の視線が男の傍らで唸り声を上げている狼にむけられる。

狼はいつでも飛びかかれるように、体勢を低く構えている。

「・・・さすがに邪魔が多いぜ。今回は引いた方がよさそうだな。」

赤い影は刀を鞘に収め、白い稲妻の方を睨みつける。

「・・・お前何者だ？」

白い稲妻の言葉に軽く息を抜き、間を置いて言葉を放つ。

「俺の名は刀鬼。その名・・・覚えておけ。白い稲妻。」

赤い影　刀鬼の全身から衝撃波が放たれ、砂埃が舞い上がる。  
そして、その砂埃とともに、刀鬼の姿は  
いなくなっていた。

忠司が現場に駆けつけた時にはすべてが終わっていた。

救急車が何台も到着し、倒れた人たちの手当と搬送を手伝っている。  
いる。

「おいおい。お前らしっかりしろ！」

そんな中、へたり込んだ暴走族の少年に発破をかけている男がいた。

「もっと怪我がひどい奴らがいるんだ。痛いのはお前達だけじゃないぞ！」

あまりにも的確かつ、きつい一言。そして有無を言わせない不思議な勢いがあった。

その迫力に、暴走族の少年達もいそいそと怪我した人たちの搬送や手当てを手伝っている。気難しい彼らをここまで思い通りに動かせるのは、相当の器量が必要だといえる。

「……ん？」

忠司はその男にどこか見覚えのあることに気付く。

いつの頃だったのだろうか、すぐに思い出せない。だが、昔出会った強烈な印象を持った少年と、今の彼のイメージがどこか重なってしまったのだ。

「……おっ？」

そして、男も忠司に気付く。

「……忠司……さん？」

忠司さんという言葉と、忠司の中にあつた少年のイメージが男と重なる。

荒れていた彼からしたら、ずいぶんと印象は変わったが、それでも間違いはなかった。

「真仁なのか？」

「はい。」

青年      真仁は爽やかに応える。

「・・・お前のなのか？見違えたな。」

忠司は親しげに真仁に歩み寄っていく。彼が知っているころよりも目の前の青年は背が高くなっていた。忠司が顔を見上げてしまうくらいに。

「・・・はい。夢を叶えて、帰ってきました。」

「夢だと？」

真仁はコートのポケットから何かを取り出す。そして、それを忠司に見せた。

「お前・・・警察官になったのか？それに階級は・・・警部だと！？」

真仁が忠司に見せたのは警察手帳。そこには制服をきた真仁の姿と、その階級が書かれていた。

「新しい部署の隊長になりますから、これくらい当然です。」

「新しい・・・部署？」

忠司はそこでようやく思い出す。対生体兵器対策班が発足されることを。そして、その隊長が一足早くやってくることを。

「まさか・・・噂の部署の隊長というのが？」

「はい。自分です。」

元気よくそう応える真仁。そんな彼の元に巨大な狼が歩いてきて

「ねえ、この人、真仁の知り合いなの？」

と、尋ねてきた。

「………!？」

巨大なだけでも十分驚くに値するだろう。だが、その狼は大きいだけでなく、人語も話してきたのだ。

「……テツ。この人を驚かせるな。」

狼　テツをたしなめる真仁。その一言に人懐っこく振られていた尻尾がしおれていくように下がっていく。

「こいつ……しゃべるのか？」

「驚かせてすみません。なにぶん人懐っこい奴なんです。」

真仁は慌ててフォローを入れながら、脳裏に数分前のことを思い返していた。

刀鬼が立ち去った後、白い稲妻と真仁は対峙していた。

「相変わらず、この街は厄介ことが多いよな。」

「おかげで休む暇もないよ。」

白い稲妻と真仁のやり取りは自然で、まるで昔からの友人のような雰囲気だった。

「この人があの噂の白い稲妻？」

「・・・えっ!？」

その二人の会話に、突如割り込んできたのがテツであった。白い稲妻は突然割り込んできた第三者の存在にあちこち視線をさまよわせる。

「ここだよ。」

そしてようやくその視線をテツに定める。

「君・・・しゃべれるの？」

「まあ・・・始めはみんな面食らうよな。」

真仁は苦笑しながら、テツの頭を撫でてやる。テツの尻尾が心地よさそうにはたばたと振られている。

「まだまだ、修行不足だ。」

白い稲妻が驚いた事を少し恥じているところに、遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくる。

「そろそろ、退散したほうがいいみたいだね。」

「そうだな。色々話したい事はあるが・・・それはまた今度にしようか。」

「うん。またね。」

その言葉を残し、白い稲妻は飛び上がる。ビルを蹴りあがり、その屋上まで飛び上がると、月を背に、マフラーを靡かせながらビルとビルを飛び越えて去っていった。

「・・・そうか。そんな事が。」

真仁が車で忠司を家まで送っていく中で、白い稲妻と刀鬼と名乗る謎の男の出現。それを忠司は真仁から聞かされていた。

もちろん、白い稲妻と真仁とのやり取りを除いてである。

「・・・実力は彼と五分といったところでしょうか。刀がある分、接近戦は刀鬼のほうに若干分があるといったところでしょうか。」

「・・・どっちも化け物並みに強いのに是不変わらないな。」

後部座席にはテツが眠っていたが、二人の会話には耳を傾けてい



るようだった。

「そうですね。」

「・・・そう言えば、お前、俺の家に来るのは初めてだったな。」

「はい。あの時は刑事としての忠司さんに色々迷惑をかけていましたから。」

数年前の真仁は色々と荒れていた。普通の人間ではない生体兵器として生まれた彼は社会からはじき出され、すれ違う人たちにすべて牙を向けていたのだ。

「でも、おかげで今の俺がいます。」

そんな真仁を変えたのは二つの出会いだった。

一人は自分よりも年下ながら、己の力を皆のために使っていた少年。その拳に、その言葉に、自分の弱さと甘えを知った。

もう一人は、いつも彼を心配してくれた刑事。

独りだった彼を孤独から救い、道を指し示してくれた。そのおかげで己の弱さを受け止めることが出来た。

二つの出会いを経て、真仁は今の道を志したのだ。己の力と心を色々な人のために使おうと決めたから。

「・・・だから、俺はこの街に帰ってきました。今度は俺が忠司さん達を助ける番です。」

「達・・・だと？他にも助ける相手がいるのか？」

真仁は笑みを浮かべながら明確に答える。

「・・・まあ・・・そうです。」

「・・・そうか。」

忠司はその言葉に満足したのか、感慨深そうに何度も頷いていた。

やがて車は忠司の家にたどり着く。

「ここが忠司さんの家ですか。」

真仁も車を降り、忠司の家を眺める。

「ちょっと上がれよ。俺の家族も紹介したい。」

「えっ？いいのですか？」

真仁は家を訪れるのも初めてならば、忠司の家族も会ったこともまだないはずだった。初対面といってもいいはずなのだ。そのために、少しためらいを覚えてしまう。だが、そんな真仁を忠司は笑い飛ばす。

「遠慮せず、晩飯でも食べてくれ・・・。」

忠司が「ただいま」といいながら家に入っていく。

「ちょっと！僕も連れて行つてよ。」

そこにテツからの批判が飛んでくる。

「あつ・・・そうだな・・・。」

真仁は忠司のほうを見る。性格はともかくとして、普通の犬よりも遥かに大きいテツをいきなり家にあげてもいいののか。普通の人ならテツを見ただけで腰が抜けても可笑しくない。だが、あげてやらないとテツが拗ねてしまう。

そう考えていた矢先に、リビングから足音が聞こえてきた。

「あれ？お父さん・・・お帰りなさい。」

出迎えたのはエプロン姿の清音だった。

彼女は父から、もう一人のほうへと視線を移して固まった。見間違いないのか、何度も瞬きをする。見間違いはなかった。

「あつ、あなたは夕方の・・・。」

顔を真っ赤にしながら、清音は口ごもる。

「そういう君は・・・。」

真仁も清音の顔を見て、驚く。

何しろ目の前には夕方に、車から子供を庇ったところを助けた女

性がいたからだ。

真仁自身は彼女を助けた時にはこの街暮らす以上、また会うかも知れないと思っていた。だがこれほど早く、しかも意外な形で再会することになるとは思いもしなかった。

「何だ？清音と知り合いだったのか？」

固まってしまった二人を交互に見る忠司。

その質問に「ええ」と簡潔に答える真仁と清音。それが微妙にシンクロしていた。

「まさか・・・彼女、忠司さんの娘さん？」

「そうだ。娘の清音だが？」

あっさりと事実を肯定されてしまう真仁。

「あの・・・夕方はありがとうございます。まだ・・・お礼は言っていないかったです。」

「いや・・・そんなの。」

真っ赤にしながら、しどろもどろに礼を言う清音。その言葉に謙虚に答える真仁。

「何騒いでいるの？」

そこにもう一つの声が加わってくる。

それはお風呂上りの慶であつた。パジャマに着替えたばかりなのか、まだ乾ききっていない髪をタオルで拭きながらやってきた。

「……お父さん帰ってきたんだ。お帰り……。なさ……。い？」

そして、慶の視線は忠司の後ろで固まっている真仁に留まる。

一方の真仁も慶の姿を見て啞然としている。

「どっ……。どうしてお前が……。ええっ？」

思わず慶を指さしてしまう真仁。その指先は大きく震えていた。

「なっ、何で……。っ……。えええっ？」

訳がわからないといったげな慶。

『えええええええええっ！？』

二人は驚きと混乱のあまりに互いに指を指したまま叫ぶ。

あまりの叫び声に、傍にいた忠司と清音は耳を塞ぐ。

「……。なんだ？お前らも知り合いだったのか？」

驚く二人の間で忠司の呆れた声が小さく響いた。

## 刀鬼（後書き）

短時間での更新故・・・感想や評価がないのがとても不安に思ったり。

これは私の小説の原点でもあります。

それゆえ・・・紹介してみたくなり・・・。

次回予告「ヒーローとしての顔。」

???「本当に疲れたよ。でもこの街にやってくるなんてびっくりだ。」

真仁「それはこっちのセリフだ。前よりもはるかに強くなっていやるし。」

フランクにしゃべる二人に注目してください。

そして・・・白い稲妻の正体がこの話で判明します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8906y/>

---

白い稲妻

2011年11月27日21時35分発行